

同志社探訪

第十四回

同志社ボート部エイトの

五輪出場

高橋 滋 (昭和45年卒)

I had quite an experience in rowing a boat.

新島襄先生の2回目のヨーロッパ・アメリカ旅行の英文直筆日記1885年8月3日の中にこのような文章がある。アメリカの東海岸とみられる湾のスケッチも添えられている。

前年の8月にはスイスのサンゴタール峠付近で呼吸困難に陥り、その夜投宿したホテルで英文の遺書を書かれているが、それから1年後すっかり体調を回復された先生は、アメリカ東海岸でボートを漕がれるほどお元気になられた。そして冒頭のような「……素晴らしい体験をした」と日記に記されている。

先生の帰国は1885年12月12日、そしてお亡くなりになられたのは5年後の1890年1月23日であった。翌年の春、第1回同志社水上大運動会が、瀬田川畔石山寺三日月楼下で行われた。新島先生の追悼行事であったが、ボート部はこれを「創部」としている。

私は1966年4月同志社大学入学と同時にボート部へ入部した。同期入部は16名、中に村井(小松高校)、清水(津高校)という二人の経験者がいた。

創部75年目のボート部は関西ではほぼトップクラスの力を持ちながら、全日本選手権では予選敗退・敗者復活戦敗退か、よくて準決勝敗退という成績であった。それくらい関東の大学は強かった。東京大学、一橋大学、早稲田大学、慶應義塾、さらに東北大学、北海道大学も強かった。

この年の夏、全日本選手権エイト(舵手付き8人漕ぎ)で同志社大学は初めて決勝に進出し

3位となった。清水が乗っていた。翌1967年は2位であった。このクルーには清水、村井の二人が乗っていた。

1968年、3年生の私は5月でフネを降り副務として対抗エイトクルーや、ジュニアクルーの食事を作っていた。この年は東京五輪から4年後のメキシコ五輪の年にあたり、JOC方針は少数精鋭の選手団を送ることになっていた。

前年2位だった同志社大学は、メキシコ五輪の強化クルーに指定されたが、戸田ボートコース(埼玉県)での強化合宿に参加しづらいという理由で、のちに外されたりもした。日本漕艇協会の方針はシングルスカル(1人漕ぎ)と舵手付きフォア(4人漕ぎ)の2クルーをメキシコへ送る小艇派遣へと変わっていた。

そんな中で、6月と7月の2回、戸田コースでエイトの記録会が行われた。6月はスタート直前、早稲田と慶應エイトが衝突したため、前年優勝の一橋を下して1位となった。7月は計9クルーが参加したが、午前の部の成績は慶應について2位、午後の部の成績は一橋、慶應に次いで3位であった。最高タイムは慶應の6分11秒であった。

日本漕艇協会はすでに小艇派遣の方針を固めていたが、将来の派遣枠と、伝統の種目であるエイト派遣に希望を持っており、目標タイムの

6分5秒を切らせるべく風向きによりスタートとゴールを変更して試みたが、しかしいずれのレースも届かなかった。

四方久男監督の頭にも、石本君夫コーチの胸中にも「オリンピック出場」という大それた概念はなかったと思う。ただただ日本一になりたい、関東勢を倒して初めて秩父宮杯を関西へ持ち帰りたい、という思いだけであつたと思う。戸田から帰り全日本選手権までの約1ヶ月間、酷暑の中で厳しい練習が続いた。同級生の整調（クルーのリード役）清水、7番村井、3番田中、B（バウ、触手）新井の4名は中心選手だつた。

そして、8月23日第46回全日本選手権エイト予選で、6分2秒1という好タイムを出した同志社は、8月25日の決勝では6分1秒4のタイムで、2位慶應に0.8秒差、50cm差で勝つた。遂にやつた！全日本選手権エイトで優勝！創部77年目の初優勝であつた。

初めて日本一になつたことは本当に凄いことで、これ以上の栄誉はないと思つていたが、驚くべき事態がその後にやつてきた。9月2日JOC総会で同志社大学エイトの単独クルーによるメキシコ五輪派遣が決定したのである！日本漕艇協会原三郎理事長をはじめ、ボート競技関係者の応援の賜物であつた。

メルボルン大学が参戦してきた。メ大は全豪大学選手権3連覇の強豪であつた。

8月31日午後4時40分、エイト決勝はスタートした。1コース同志社、2コース東大、3コース慶應、4コースメルボルン大、5コース早稲田の5艇レース。スタートから200mで2番手の慶應に3分の1艇身リード、1000mでは2秒7差で約半艇身リード、そして2000mゴールでは6分4秒3、慶應に1艇身3分の1差で水をあけて勝つ



1969年8月31日エイト決勝 2連勝なる！
手前から、1位同志社、4位東京大、2位慶應、3位メルボルン大、5位早稲田

その後の練習や諸手続きは慌ただしく進められ、クルーは9月22日にメキシコへ向けて旅立ったのだが、監督、コーチ以下選手たちも、国内で合宿を始めた私達も共通して感じている不安が一つあつた。それはメキシコ五輪ボートコースのソチミルコは海拔2500mにあることだつた。「高地は酸素が薄い、そこでのスポーツ競技は厳しい」という風評を聞いていたからだ。全選手団の中で決定が最も遅かつたボート選手団には、高地対策などする時間は全くなかつた。

9月2日に派遣が決まり、その後何の対策をする暇もなくソチミルコへ到着したクルーたちは練習を始めて驚いた。体操、ストレッチのあと軽くランニング：ものの数百mと走らないうちに、脈拍の上昇・頭痛という希薄な酸素の恐ろしさを知らされた。さらにアカプルコの港湾ストライキのため荷揚げが遅れ、愛艇ワイルドローバー4世号が到着したのはレース10日前であつた。自艇での練習を始めてどうにか500mくらいまで漕げるようになったところに予選を迎えた。10月13日の予選では6分34秒79で最下位となり、15日順位決定戦ではラスト1000mで地元メキシコに抜かれ6分52秒02で最下位という結果であつた。「薄い酸素」は想像を絶する大きな壁であつた。

た。3位はメ大、4位東大、5位早稲田であつた。

四方監督も内田コーチも選手、マネージャー全員が歓喜、そして泣いた。とりわけメキシコ組の6人はメキシコの恥を晴らせた喜びにおいおいと泣いた。コックス（舵手）の鈴木（3年）に続いて私も戸田コースに放り込まれた。青藻の浮いた戸田コースの水の臭さは今も覚えている。

前年の初優勝は、「日本一になりたい」「秩父宮杯を関西へ」という漠然としたものがパワーの源であつたが、2回目の優勝は「メキシコ五輪最下位の汚名を晴らす」「日本で一番強いことを証明する」という具体的な事柄を、部員全員が認識し、一丸となれたことが原動力であつた。空気の薄いメキシコ・ソチミルコの屈辱を晴らしたのである。

同志社大学ボート部は今年創部126年目を迎えた。全部員105名は頂点を目標に合宿練習を続けている。創部77年目の初優勝を勝ち取つたあの頃から変わるものはない。

*資料提供…同志社社史資料センター
同志社艇友会

帰国後、「やはり行かせるべきでなかつた」、「実際の滑り込み派遣は日本漕艇協会のエイトへの固執」など、新聞・週刊誌に批判的に書かれた。好タイムを出して日本一になり堂々と派遣枠に入つたエイトクルーには何の落ち度もないのだが、その後の瀬田での練習や翌年の戸田コースではかなり厳しい声と眼にさらされた。

四方監督、清水主将、村井副将、主務の私は「もう一回しっかり勝つて汚名を晴らそう」と、何回も確認しあつた。

1968年11月練習を開始し、メキシコでの屈辱を晴らしたい、俺たちの力を見せつけたいという気持ちから冬季の陸上練習、2月末からの乗艇練習の密度は濃いものになり、選手たちはそれによく耐えつてきた。

春からフネはよく走つた。私の同級生4人を柱に、3年生3人、2年生1人（内五輪経験者6人）の大型クルーは5月の朝日レガッタ、7月の関西選手権ともぶつちぎりで優勝した。特にスタートは前年にも増して凄みのあるものになつた。

絶対に勝つ！同志社が一番強いということを見せつける！ボート部全員が強い信念で臨んだ第47回全日本選手権では、ライバルの慶應に加え

同志社大学七不思議 第一回
牛の石像
高桑 慎吾（平成6年卒）

同志社大学に七不思議があるという話を聞きました。

学校七不思議というものは小学校か中学校くらいまでの怪談話というより、仲間内で共有する娯楽のひとつであるようなイメージがあり、久しぶりに聞いた「七不思議」という言葉にノスタルジーを感じるとともに、母校大学に七不思議があるということに好奇心をとんでも刺激されました。

インターネットで調べてみますと、同志社大学七不思議について書かれたものがいくつもありましたので、七不思議全てを知るのは簡単でした。その中の「牛」については今でも比較的簡単に今出川キャンパス内で見つけられることを知り、七不思議のひとつを実際に体験するべく、「牛」を探しに出かけました。

「牛」といっても「牛の石像」なのですが、エルサレムの方向を向いているのだそうです。いたずらで向きを変えられても翌日には元に戻つ